他人の生活

邦光史郎

他人の生活

邦光史郎

講談社

他人の生活
定価　三九〇円
第一刷発行　昭和四十四年十一月二十八日

著　者　邦光史郎
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番一二号
郵便番号一一二
電話東京（九四二）一一一一
振替東京三九三〇
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　有限会社馬場製本
©邦光史郎　1969　乱丁本・落丁本はお取替えいたします。

(分) 0-0-93 (製) 148038 (出) 2253 (0)

目次

その日　5
蒸発　23
寝返り　41
秋雨前線　57
輸入重役　78
許されざる者　97
女人の館　115
仮面の粧い　133
珠を奪う者　151
夜と昼　170
男と女　188
冬の旅　206
散りぬるを　223

装幀　山内　暲

カバーイラスト　磯野宏夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

他人の生活

その日

一週間のうちで、サラリーマンが、もっとも疲れを覚えるのは、月曜日だという新説があるが、やはり小坂は、金曜日の方が重苦しくてならないと思った。

午後三時、いままでひっきりなしに鳴りひびいていた電話やタイプライターの音がふと止んで、真空状態のような一瞬が訪れた。

そのくせ、室内を見渡すと、いつも見慣れた同僚たちの顔がそっくり揃っている。

一様にどんよりと重く疲労の影を漂わせた表情、だからこんなに社内が静かなのだろう。小坂哲夫は、煙草をくわえた。

昨年も、六年前も、そして明日も変わりないだろう生活がここにある。一日として同じ日がなかったくせに、毎日が判でおしたように単調なサラリーマンの日常、その生活の河に漂い流されて行く自分の人生、そんな感慨をもつことすら、めったにありはしないものなのだ。

「係長、これでよろしゅうございますかしら……」

背中越しにそよ風が吹いてきたかと思った。

ふり返ると、久保江里子の、うるんだように黒く大きな瞳が自分をみつめていた。

視線が交錯しても、すこしも外らそうとしないひたむきなその瞳に出会って、小坂は、たじろぐような驚きを覚えた。

——なぜ、こんな眼の色で自分をみつめようとするのだろう——

ここは会社なのだというサラリーマン特有の抑制が働いて、小坂は視線を窓に向けた。

冷房され、密封されているビルの一室から眺めた真夏の空は、どこか白々しくて人工的な匂いすらする。

——このオフィスに、生身の人間の情念を持ち込んできてはならない——

たった二、三度、食事に誘ったことがあるだけで、こんな息苦しさを押しつけられたのではたまらないと思った。

「三通、タイプしてくれただろうね」

感情のこもらない声を作った。

「はい……」

江里子は、一通ずつ、小坂の机の上に書類をならべようとした。すると、いっそう間近かに女の肌の香が迫ってくる。
「いいよ分かった……」
急いで小坂は立ち上がった。
だが、あいにく課長は欠席、部長は東京へ出張中であった。
——しかたがない。直接、社長にお渡ししてこよう——
廊下へ出ると、そこは社内であって半分はそうでないような気安さが感じられた。
しかし、社長室の扉をノックした時、小坂は、そこに張りつめている異様な緊迫感に気づいた。
「藤村さん、もうこれっきりで伺いませんからね」
そう言い放った男の声が、扉越しにありありと聞き取れた。
いったい社長室に誰がきているのだろう。たしかにその男は、もうこれきりで伺いませんからねといかにも脅迫がましい言葉を吐き捨てていた。
しかし、仮りにも社長に向かって、しかも訪問客が、そんな失礼きわまりない挨拶を残して行こうはずがない。
——誰だろう……——
ノックすることをためらって、小坂は、社長室の扉の外にたたずみつづけていた。
すると、すぐ扉が開いて、まだ若くて蒼白い顔色をした、そのくせやせてとがった両肩をぴんと怒らせた男が、緊張し切った面持ちで姿を現わした。
「岩城さん……」
思わず小坂哲夫はそう呼びかけてしまった。
このフジムラ産業の親会社ともいうべき全国ナイロンの若手社員で下請け企業との連絡担当を勤めている岩城晴夫であったからなのだ。
むろん小坂はこの岩城をよく知っている。
だが、岩城は、突き刺すように鋭い視線を、きらりと投げかけてよこした。
「どうしたんです？　いったい……」
しかし、相手は、表情を伏せるようにして、足早やに立ち去って行った。
——何かあった。社長と全国ナイロンとの間に、きっと気まずい何かが起こったものにちがいない——
小坂は、充分しまり切っていない社長室の扉をノックした。
「どなた……」
低くしわがれた声が答えた。
「営業企画の小坂でございます」
一歩社長室へ入ろうとして、小坂は、窓を背負った社長の姿が、いつになく打ち沈んでいることに気づいた。

「何か用かね……」
まるで墓場からひびいてくるように陰気な声であった。
「はい、九月に行ないます新製品発表会の企画書をお届けに伺いました……」
「友田に渡しておいてくれ……」
「は。常務は只今東京へ御出張中です」
「じゃ、おいて行きなさい……」
丸くもり上がったその背中が、今では重いコブを背負ったように思えてならないほど、藤村社長は深々と首を垂れて、しきりに何事かを考えあぐね、何かの重圧に耐えようとしている。
「失礼いたします」
めったに入ったことのない社長室を横切って、小坂は、社長の大型デスクに歩み寄ろうとした。
女性秘書の姿もなく、応接用のテーブルにすっかり冷え切ったコーヒーが二人分、しかも、ほとんど口をつけた様子すら見受けられなかった。
「きみ、今日は、十三日の金曜日じゃなかったかね……」
うめくように社長はそうつぶやいた。
いつもなら一係長にすぎない小坂に向かって、こんな弱り切った姿を示したりはしない社長なのだ。
「社長、今日はまだ十二日でございます……」
「そうか、十二日か……」
すでに六十の坂を越えているが、まだまだ社員たちの先頭に立って指揮する元気さを充分もっていたはずの藤村泰造なのである。
けれど、こうして間近かにのぞき込むと、その赤らんだ額にはいく筋もの横皺が深く刻み込まれ、肉づきのよい頬のあちこちに老年性のしみが色濃くにじみ出ていて、やはり老いたる猪武者の感を免れない。
「それで、友田は、いつ帰ってくるんだ？」
「はい、常務は、多分、明日お帰りの予定だと思います」
「明日か……」
いかにも遅いなという思いがこもっているようだった。
「今日お帰り頂くよう、電話を入れてみましょうか」
泊まっているホテルはすぐ分かるはずであった。
「いや、構わん。もうすんだことだ……」
「は……」
しかし、気になる社長の一言であった。
――いったい、何がすんだことなのだろう……――
それが、もう二度と伺わないつもりだと言い残して行った岩城の態度と、どこかでたしかに深いつながりをもっているように思えてならない。
藤村社長は、やや斜めに太い猪首を傾け、卓上の一点をぼんやりみつめながら、そのぽってりと丸い指先を、しきりに組み合わせたりほどいたりしつづけている。

――たしかに、重大な何かが起こったものにちがいない。

――

社員である自分にとって、それはまことに興味深い疑問であった。しかし、これ以上社長の身辺に立ち入るわけには行かなかった。

藤村社長は、思い出したように電話機を取り上げようとして、まだ身近かに控えている小坂の存在に気づいた。

「きみ、もういいから、戻りなさい」

猪と仇名されたかつての社長には見られなかったげよのやさしさであった。

「はい、お邪魔いたしました……」

去りがたいこだわりを抱いたまま、小坂が社長室を出ようとすると、

「うむ、京都五六一の七五四三につないでくれんか……」

社長の声が背後から追ってきた。

――五六一局というのは、たしか祇園のはずだ……――

憂悶を花街でまぎらそうというのだろう。つまり俺たちが安酒に憂さをはらそうとするように――。社長も同じことなのだと思った。

「小坂君……」

廊下の向こうから声がかかった。

呼びとめたのは、総務部の藤村泰男、というよりは藤村社長の長男といった方がよいだろう。

このフジムラ産業には、社長の親族が、それぞれに重要なポストを占めている特徴があって、営業担当常務の友田信二が社長の甥、工場長の島井宏が従弟という具合に、同族会社色が強かった。

だから、いくら頑張ったところで、どうせ自分たちは、同族で固めた経営陣に割り込めはしないのだと、あきらめを抱く社員が多く、それが企業の前進を阻む大きな障害となっているのだった。

「ちょうどよかった。いま営業へ君を探しに行ったとこなんや」

信州生まれの社長とちがって、この泰男は、生ッ粋の大阪人らしく振舞っている。

ガメつく稼いで、きれいに使う、それが僕の信条なんや といっているが、要するに苦労知らずに育った父ちゃん坊やであるにすぎない。

まだ小坂と同年の二十八歳だというのに、泰男はすでに一男一女の父親になっていた。

「実はな、まからん屋のオッサンから誘いを受けとるんや、この前の売り出し企画で、君の世話になったさかい、また一席設けたいちゅうてな」

絶えず目を動かし、身体を揺すっていないと気がすまない男なのだ。

それはこの男のむら気で一つのことに集中し得ない欠点

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

を現わしているのかもしれなかった。
「いつですか……」
明日の土曜日は、久しぶりに妻の実家を訪れる約束になっていた。だからまずいなと、内心小坂は、断わる口実を探しかけていた。
「それが今日やねン。どうせ明日は土曜日で昼までやろ。そやさかい、少々遅うなっても構わんやろちゅうことになってな。祇園で麻雀、かまへんやろ」
すでに約束ずみだという顔つきであった。
「京都で、ですか……」
もし同じ祇園で、ばったり社長に出会ったら、この男どんな顔をするだろうかと思った。
「そや、注文の妓があったら、前もっていうといてや。なんなら泊まったかて構へんねで……」
祇園といっても、格式のある甲部の花街ではなく、まからん屋ストアの招待してくれるお茶屋は、安上がりで、妓たちも不見転の多い安井界隈の店なのである。
「ほな小坂君、五時半に下のガレージまできてくれへんか。僕の車でいっしょに行くさかい……」
浮き浮きした足取りで去って行く泰男は、社長室の前を通りすぎる時、ひょいと首をすくめてみせた。
だが、たった今沈み切った社長の姿を見てきたばかりの小坂は、そのおどけた様子に同調する気分には到底なり得なかった。

淡く霧がかかった西空のかなたに、熟れ切ったトマトのようにぶよぶよと赤い夕陽が引っかかって、それはまるで拾って行く何者かを待ち受けているかのようだ。
十五階にあるホテルの一室から眺め下ろす東京の街なみは、重なり合う石筍の群がりのようなものだった。
このどんよりと薄曇った空を天井とする、これは巨大な鐘乳洞なのかもしれない。
フジムラ産業の友田信二は、すでに輝きを失った夕陽が、いつまでも沈み切らずにためらっている東京の暮色をぼんやりと眺めながら、いったいこの街のどこに一千万をこえる巨大な人口がひそんでいるのだろうかと思った。
——たしかに東京はあまりにも膨張しすぎてしまった——
そのためにコントロールがきかなくなってしまい、自らの力をもて余す巨人の歎きを見なくてはならなくなった。
だが現在の東京を醜く汚れた街だと思い込むことはすこし早すぎるようだ。このいく重にも積み上げられた人工都市のあちこちに、思いがけない都市美の断片が引っかかっていて、それを拾い集めて行くことが、新しい悦びであり発見するたのしみを増してくれそうだった。
まだ西空には明るみが残っているけれど、こうして眺め

渡す地上には、ぽっぽっと灯りがともり、その淡い暮色の街を、甲虫の列のような車の群れが、ゆっくり動いて行く。

夏も冬も、さして変わることなく適温に調節され、昼も夜も同じように照明されているこのビルというものは、さながら人間を飼い育てる蚕棚のようなものであった。

——今夜一日限りか……——

東京へ出張するたびごとに、友田は、孤独な自分にめぐり逢い、会社からも、そして家族からも逃亡してしまった男のたのしみの破片を、よく拾い集めようとしたものだった。

——もし、このまま、大阪へ帰らなくてすむのだったら……——

この巨大な都会のジャングルの一隅にささやかな巣をみつけて、ひっそりと、誰にも知られないもう一つの生活を営むことが可能であるかもしれない。

そしてそこで、ひとりの女性にめぐり逢って、現在の家庭にはない、別の家庭を形造って行くことが許されるかもしれないのだ。

——だが、結局は、同じような結果を産み出してしまうのがオチかもしれない——

蟹はその甲羅に似せて穴を掘り、赤とんぼはとび直してもやはり元の枝に羽を休めようとする。

電話のベルが鳴って、東京支社の赤井がいきなりこう告げた。

「常務、いよいよ全国ナイロンが、うちの社長に、縁切り状を叩きつけたらしいです」

その一語に、妄想のすべてがけしとんでしまった。

「ほんとうかね、それは……」

頬が硬張り、全身から音立てて血が引いて行くようであった。

「はい、たった今、情報が入りました。全国ナイロンの上層部に近い人から出た情報ですから、恐らく間違いないものと思われます。とにかく弱い者いじめですよ。この期に及んでから、絶縁状をつきつけてくるなんて……」

さすがに赤井も昂奮しているとみえて、ずい分早口になっていた。

「じゃ、なんだな、これで一切、全国ナイロンの保証がなくなるってことだな」

「そうですよ、親でも子供でもない、これからは一切面倒をみてやらぬというのですから、銀行だって、担保を抱え込んだまま、一切金を貸そうとはしなくなっちまうでしょうね」

「うむ、銀行も銀行だが、さしあたり困るのは、原料の仕入れ先だ」

「ええ、どこでも、売ってくれはするでしょうが、貸しちゃくれんでしょうからね」

「よし、今夜の飛行機を押えといてくれないか。七時から、一軒だけ招待がある予定だが、十時には、羽田へ行けるだろう」
「十時じゃ間に合いませんよ。九時半発が最終ですから……」
「じゃ、新幹線の最終は……」
「ひかりが八時三十分、そのあと、名古屋どまりのひかり六十一号ってのが、九時発になっています」
「何かないのかね、なんでもいい、今夜、いや、明日の朝早く大阪へ着けばいい」
「じゃ、午前六時発のひかりを取っておきますよ、九時十分に新大阪着です」
「よし、頼んだよ。あとで切符をホテルまで届けておいてくれないか。それから情報も頼むよ」
とても今夜は睡れそうにないなと思った。
無意識に煙草を口にしながら、そのくせ火をつけもしないで、また電話に手を伸ばしていた。
ダイヤル式なので、すぐ大阪の本社にかかった。
「もしもし、友田だが、社長室につないでくれないか……」
しかし、電話口に出た声は、どうやら宿直室の警備係員であったらしい。
「はい、もういらっしゃいませんが」
「誰もおらんのか……」
「はい、みなさん、もうお帰りになっております……」
いかにも間のびした返事なのである。
——何をしてるんだろう。この大事な場合に……——
友田は、すぐ社長の自宅に電話を入れてみたが、どこか寄り道しているとみえて、まだ帰っていないという。
——しようがないな……——
いら立ってみたところで、どうにもなりはしないのだ。
といって、とてもじっとしてはいられない。こんな経験は四十五歳になるこれまでに何度もあったはずなのに、そのたびごとに新しい狼狽を覚えなくてはならない。
——要するに人生なんてくり返しなんだ——
くり返しつつ昇って行く螺旋階段に似ていると思った時、迎えの車がやってきた。
間屋筋の招待であるが、ずい分無理をきいてもらっている矢先なので、むしろこちらから一席設けたいくらいのところであった。
しかし相手の仕入部長は、いかにも呑み込み顔で、あれこれと気を配ってくれた。
まず食事に誘われ、それがすむと、銀座へ廻ってクラブをのぞき、それから取っておきの秘密バアがありますので、ぜひどうぞと否応なく車に押し込まれてしまった。

「どうせ、明日、お帰りなんでしょう」
接待慣れた仕入部長の中島は、どうすれば相手を満足させられるかというテクニックを、ちゃんと心得切っている。だから、いつも友田は、心の底で、ひそかに中島の誘いを待ち受けていたものなのだ。
しかし、今日だけは、どうしても酔い切れない、いや遊びに身を委し切れない心配事を抱え込んでしまっている。
その重みに耐えかねて、つい友田は、浮かぬ顔つきをのぞかせてしまった。
だが、それだけに、いっそう中島はサービスの限りを尽くそうとしたものだろう。
車は、いつか赤坂をすぎ、青山界隈を走っているようだった。
「さっき電話で予約しておきましたから、相客とかち合うようなことは絶対にありません……」
「でも、要するにバアなんでしょう」
「ええ、バアですよ……」
にやりと意味あり気に中島は笑いを洩らしている。
——女でも抱かせる気なのかな——
それが顧客接待のフルコースになっているのだった。
——それなら、昨日にしてもらえばよかった——
そうすれば、思い切り羽目を外して遊びを堪能できただろうし、明日妻の許へ戻って、あれこれ気を使うこともいらなかったかもしれないのだ。
「さあ、参りましたよ」
車は、かなり大きな構えをみせているマンションの前でとまった。
外界から全く隔絶されたマンションの一室を使って、近頃よく会員制の秘密バアが流行しているそうであるが、まだ友田は、一度もそんな冒険を試してみたことがなかった。
エレベーターで六階に昇り、ひっそりした廊下を歩んで、目ざす部屋の扉口に立ってブザーを鳴らすと、扉の上部に取りつけられたのぞき窓から、きらりと男の片目が光った。
いちいち首実検してから入室させようという警戒のきびしさなのだ。
室内は、さして広くないサロンになっていた。けれど、カーテンを押し分けて入ってきた三人のホステスを一べつして、友田は思わず顔をそむけてしまった。
蟬の羽よりまだ薄いナイロンのガウンをまとったばかりの、まだ若い女身が、ありありと透けてみえたからであった。
女たちは、赤、水色、黄色、思い思いのスリッパを素足に突っかけていた。
身につけているものといえば、そのスリッパと薄いガウ

ンがあるばかりなのだ。
これがもし全裸であれば、驚きはしても、単なるショー的効果しかなかったかもしれない。けれど透けてみえる薄い衣裳のおかげで一層なまめかしさが添えられた。
部屋の両隅に隠されたスピーカーからやわらかく甘美な感じの音楽が流れ出し、女たちは、二人の客のあいだに席を占めた。
「この子とあなたのとなりが十九歳、そちらが十八だったね……」
五十男の中島と比べれば、娘よりもまだ若い女たちなのだ。
彼女たちは、思ったよりつつましい微笑を浮かべ、まだいくらかぎごちない手つきでビールを注いでくれた。
「全く水商売臭さのない素人娘のサービス、それがここの特徴でしてね」
言いつつ中島は、友田の左右に侍している二人の娘を、どちらがいいかなという風に眺めやった。
ひとりはやや大柄、もうひとりはいかにも十代の娘らしくすらりと引きしまったやせかたをしている。
「友田さん、となりへいってネクタイと上衣をとっていらっしゃいませんか。どうもこれじゃリラックスしませんからな」
それは何気ない誘いのようであった。
けれど、もうそれで充分友田には察しられる何かがあった。
「ええ、あなたは……」
「むろん、私も……ところで、どちらの人に手伝ってもらいましょうか」
「そうですな……」
目をやると、膝をそろえた女たちの胸許から下へつい視線が向いた。
どうせ気立ての善し悪しなど外見から分かりはしない。だが、なんとなく感じがよさそうだという相手をつい択びやすいものである。
「じゃ、あなたに手伝ってもらおうかな……」
友田は、小柄で眼のきれいな娘に微笑を向けた。
ほほえみ返して、娘はすぐ立ち上がった。
並ぶと、友田の肩先にそのきれいな眼が光っている。
哀しいほどよく澄んだ瞳なのである。
——困ったな。この子に到底悪いことなどできそうにない……——
しかし、すでに選んでしまった後なのだ。
女は、行きましょうというように、明るく腕をからめてきた。
扉を押すと、淡く照明された廊下があって、左右に三つばかり小部屋がならんでいる。

その二つ目の扉の中に女の部屋があった。
エアコンディショナーの響きばかりが部屋うちにこもっていて、ダブルベッドと、三面鏡と、ティテーブルと二つの椅子、それ以外には、小さな衣裳ダンスが眼につくぐらいのものであった。
「いいお部屋でしょ……」
ちらっとはにかみを浮かべて、女は、友田のネクタイに指をかけようとした。
抱きすくめるのが痛々しいほど、女は、まだあどけない唇をしていた。
「なんて呼べばいいの……」
「私……。トモコ……」
どうせここだけの源氏名（フラワー・ネーム）にすぎないのだろう。けれど、自分と同じ呼びかたを名乗る女の名前に、友田は、一種宿命に似た好意を覚えさせられた。
——これは、今日一日かぎりの遊びなのだ——
だから、それゆえにこそふれ合う肌の暖もりが哀れでならない。
「十八だとかいったね……」
「ええ、でも、二十八かもしれないわ」
まだ稚い娼婦は、まじまじと男の眼の中をのぞき込んで、自分の嘘の効果を見定めようとした。
だが、男は、今年十六歳になった自分の娘のことを、ちらと思い浮かべて苦い表情を滲ませている。
「ねえ、二十八より、やっぱり十八の方がいいの……」
自分の若さに誇りをもっているのだろう。
女は、若いということがその価値の基準にされやすい。
「そりゃそうさ……」
若いからこそ珍重され、こうしてこの密室に飼われているのだと、友田は、その小さな唇を吸い取った。
ガウンの下で、稚くしなやかな身体が抗っている。
男の抱擁を官能の誘いとは受け取らず、まだ息苦しがっているゆえなのだろう。
そのくせ、いかにも世慣れた妓であるかのように、いく分唇をとがらせて、
「ねえ、あんたも早く服をとりなさいよ」
と言った。
——はるみと二つしか年が違わない——
まるで娘の友人を、いま犯そうとしている不倫な男のような心地にさせられて、友田はやや鼻白んだ。
——あまり若すぎる女は、かえって罪なものだ——
けれど、このままネクタイをしめ直して出て行く訳にもいかない。
女は、肢を組んで腰かけながら、小さなテーブルの上にビールとコップをならべている。
「まだ飲むんでしょ……」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo